

神奈川の道德

日本道德教育学会
神奈川支部
令和6年1月24日発行
第23号

日本道德教育学会神奈川支部

ハイブリッド配信による研究大会 2023

1. 「個別最適な学びとパッケージ型ユニット」 田沼茂紀 支部長（國學院大學）

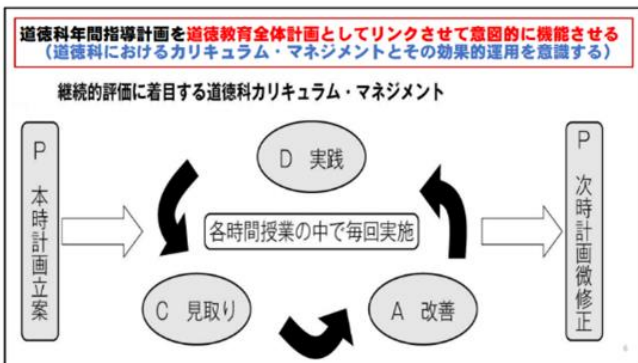
マルチユニット型道德学習を導く3つのアプローチ

①道德の手詰まり感をどう解消すべきか、②令和の日本型道德科授業とはどういふものか、③価値伝達型ではなく価値探求型の道德科授業への3つのアプローチをもとに道德科をより自己省察的なものにするべく、未来志向的な「マルチユニット型道德学習」を提唱する。

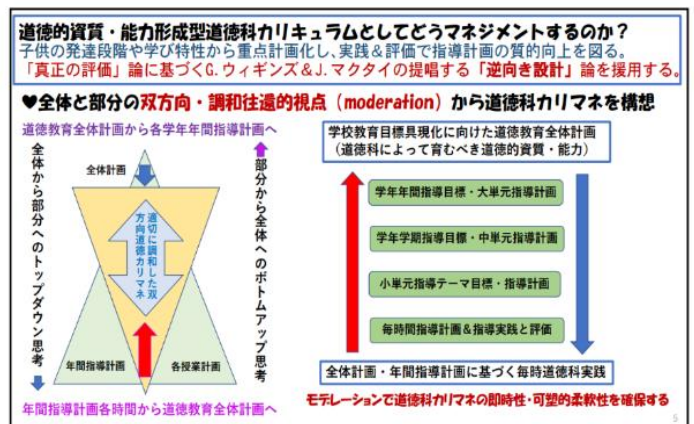
モラルラーニングスキル (MLS)

従来重要視されてきた「道德的価値理解」は、教師主導で教科書、教材等を用いた教化が可能であると考えられてきた。一方で、「道德的感性」は個別的・個性的なものであり、児童・生徒一人一人が磨き、育てていくしかない。これからの「考え、議論する道德学習」では、コンテンツではなくコンピテンシーの観点から授業を捉える必要がある。そこで、モラルラーニングスキル (MLS)こそ、道德的資質・能力を敷衍するものといえるのではないか。すなわち、①自分事として気づける力、②自ら学び深め価値づける力、③自分の中で納得する力である。

道德科のカリキュラム・マネジメント



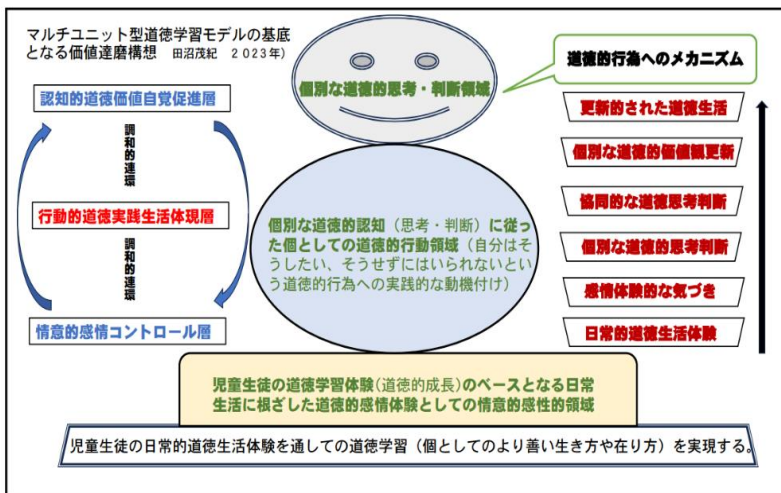
道德科カリキュラムの構成



パッケージ型ユニットによる道德学習カリキュラム開発の意義

パッケージ型ユニットとは、児童生徒一人一人を道德学習の主人公として位置づけた能動的価値追求の場を提供し、その学習の場を連ねることで自らの道德的価値観形成を促進していけるようにする道德学習プラットフォーム (学びの基盤) を実現していることとするカリキュラム開発を意図した道德科授業方法理論である。

マルチユニット型道德の基礎となる考え方「価値ダルマ構想」



パッケージ型ユニットのパターン例

- ① 複数時間で単一価値を多面的 (単一 or 複数教材) な視点から追求する。
- ② 複数時間で複数価値を関連づけ (単一 or 複数教材) ながら追求する。
- ③ 複数時間で価値追求するために自分たちで学習計画 (複数教材の中から選択 or 自分たちで必要な教材を探す) を考えて展開する。
- ④ 設定テーマに基づく価値追求を実現するために、他教科や自分たちの日常的道德的生活に関連づけて多面的・多角的な視点から学習する。

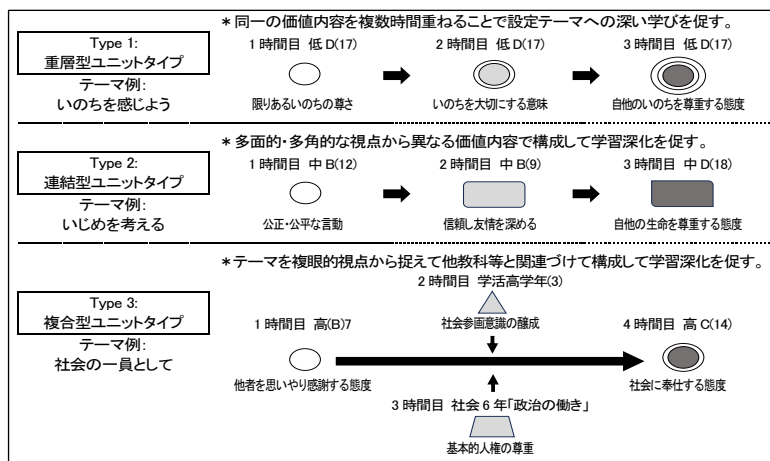


多様で柔軟な道徳学習を実現するパッケージ型

ユニット構成のタイプ別運用計画

年間 35 時間を「大単元」、各学期を「中単元」、各月を「小単元」と捉えることによって、「学習のまとめり」(ユニット)が見えてくる。これらをイメージしながら授業実践を行う。ここでは各ユニットを 3 種に分類した。例えば、「複合型ユニットタイプ」の場合、道徳のために他教科や日常生活があるわけではなく、各教科等の道徳学習を意図的に束ねていく。

なお、1 ユニットは 2~4 時間程度で計画する。



実践発表「パッケージ型ユニットの有効性と可能性」及川仁美 会員（盛岡市立厨川中学校指導教諭）

パッケージ型ユニットの有効性

これからの時代に必要とされる力の育成に際し、道徳科においては、①社会とのつながりを重視した教材を開発し、②子どもの「問い」を軸とした授業を展開した上で、③対話を通して建設的な共通解に迫ることが手立てとして考えられる。これらの具体的実践手法として、パッケージ型ユニットが有効である。また、単発の 1 時間ではなく、各ユニットの終末に複数時間にまたがるユニット全体のまとめを行い、学びのつながりを改めて見つめさせることができる。



実践例 I : 総合と関連させてよりよい自分について考える

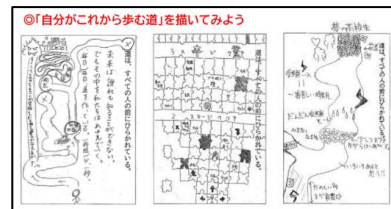
目標: ありのままの自分を受容し、自分のよさを見つけながらよりよく生きていこうとする心情の育成を目指す。

「自分はどうか生きるのか」という問いと向き合い、未来への希望を持たせる。

- 1 時間目: 道徳 [A(3) 向上心、個性の伸長] 「私は十四歳」どうしたら新しい自分になれるのかについて考える。
- 2 時間目: 総合 NPO 未来図書館による講話から様々な職業の良さを知り、大人に対する漠然としたイメージの具体性を高める。
- 3 時間目: 道徳 [A(4) 希望と勇気、克己と強い意志] 自作教材の詩を使用する。

まとめ

- 振り返りでは生徒一人一人がこれからの「自分の道」を文字ではなく図で表した。
- 受験以外の進路の価値に気づく生徒が増えた。
- 多面的・多角的にテーマと向き合わせることができた。



実践例 II : 「さ、ひっくり返そう~思い込みを変えていく新しい風~」

目標: 自分の中の「無意識のバイアス」と向き合い考える。

実生活や社会とのつながりを考え、これからの社会の在り方と自分の生き方を考える。

【全 2 時間】道徳 [C(12) 社会参画、公共の精神] + (B(9) 相互理解、寛容 / A(3) 向上心、個性の伸長 / D(22) よりよく生きる喜び)

- 1 時間目: 芸術や福祉分野に携わる企業を取り上げ、福祉に関する生徒の既成概念を変えていく。芸術作品を鑑賞し、それらが障害者が制作したものであることを伝え、驚きや意外性を持たせ授業の導入とする。個々の考えたい問いを集約し、「無意識のバイアス」や「普通とは何か」「差別」などをキーワードとして、それらを自己の問いに戻し、再考させた。授業を通して「視点を変えることの意義」に気づいた生徒が見られた。(また、その後「福祉と教育可能性」に関するコラボ授業も実施した。)
- 2 時間目: 新進気鋭の介護施設運営企業を取り上げた。新聞記事やニュース映像を用いて、介護業界の常識をひっくり返す「新しいことに挑戦する企業」を題材とした。価値は一つに定まらないものであり、社会的な問題や活動をもとに自分自身の考えを持つことの大切さについて考えさせた。介護職を身近に感じ、興味関心を持って授業に臨んだ生徒が多かった。

まとめ

- これまで道徳科で中心とされてきた「1 教材 1 時間で完結」という形をあえて外し、数時間のパッケージ型ユニット学習で学びを深める方法は、生徒の振り返りの記述等からも、非常に有効であったといえる。
- 主となる内容項目に加えて「社会とのつながりの視点」を持って考えさせていくことは、中学生という成長段階において、多面的・多角的に考える視点を持つ点からも望ましい。
- 自分の問いを持ち、自分事として深く考える時間を持ったり、他との対話を通して新たな視点を持ち視野を広げたりしていくために、複数時間での多様な学びを活用していくことが今後さらに求められていく。

講演「総合単元的道徳学習に託した思いと具体的展開—よりよい自己と社会（集団）を課題追求的に追い求める—」

押谷由夫 先生（武庫川女子大学）

「個別最適な学び」と「協働的な学び」について

本支部の研究テーマ（「道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して～一人一人が主体的に関わる道徳科授業～」）においても、「個別最適な学び」と「協働的な学び」に触れられている。道徳教育において、これらは統合されるものではないかと考えている。教育界の動向としても、個人と集団の学びの両方を大切に、子どもたちが自らの未来をつくるエージェンシーを発揮することで、個人と社会のウェルビーイングを目指す方向に進んでいる。

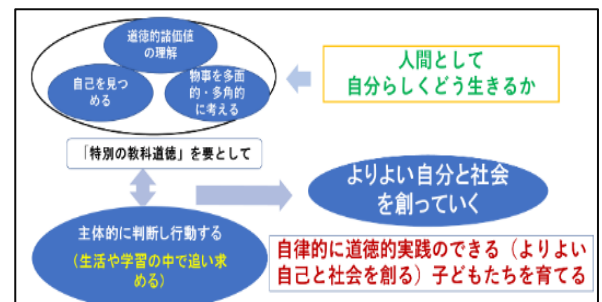


これからの教育で最も大切にすべきこと

- ①教育は、一人一人の幸せな生活を基盤として、生涯に亘って幸福を追い求められる力を育むものである（個人と社会の幸せ）
- ②そのために、一人一人及び集団の実態に応じた社会への対応を図る教育が必要である（ICTの効果的利活用）
- ③新しい社会の創造は、多様性の共生（ダイバーシティ）の中でこそ可能である

総合単元的道徳学習論

個別の学びと協働的な学びを統合するものとして、道徳教育が重要な役割を果たす。特に、各教科の特色を生かす、道徳的な知識や方法を各教科に関わらせるという意味で、道徳教育の中核としての「特別の教科道徳」の存在が重要になる。



総合単元的道徳学習のポイントと願い

- (1) 道徳教育は本来総合単元的な学習を必要とする
- (2) 子どもを主体とした道徳学習の確立
- (3) 各教科、特別活動、総合的な学習の時間、外国語活動における道徳教育の推進
- (4) 道徳的実践力（道徳的実践を支える内面的な力）の多面的な形成
- (5) 学校教育の中核となる道徳教育の確立

総合単元的道徳学習の具体的手順

- (1) 何をねらいとするか
- (2) ねらいにかかわって各学習活動や日常生活のなかでどのような学習ができるかを押さえる
- (3) さらに、どのような学習が必要かを押さえる
- (4) それらをつなげてねらいに関する子どもたちの意識の流れを連続化できないかを考える
- (5) その際、「特別の教科道徳」の学習を中核に位置づける

総合単元的道徳学習の計画（フォーマット）

「特別の教科道徳」を要に関連する教育活動を計画的に連携させて道徳学習を計画する。（一定の期間を設定して、具体的に計画していく。）

教科	「特別の教科道徳」	学級活動	総合的な学習の時間、行事	日常的取組（教室環境含む）	子どもの心の動き
（教科の特質に応じた道徳学習）	（道徳学習の要として、道徳的価値の自覚を深める）	（実践的活動を重視）	（調べる学習、体験学習を重視）	（掲示や朝の会、帰りの会でのたがやし、ノートへの記入等）	（全体を通してポイントになる学習活動等における大きな子どもの心の動きを押さえておく）

家庭や地域での学習

（家族にも協力してもらい、家庭でも目標や取り組みも書けるようにする。地域社会での活動も書く）

個人学習

（自分が心がけたい目標や計画を書く）

その他（留意点等）（この学習用のノートをつくる）

成果と課題

- 学級経営など広い視野から学習を捉えられるようになった。 ○事前・事後の学習とのつながりを考えるようになった。
- 課題として総合的な学習の時間に取り込まれてしまいがちである。
- 一時間の道徳科の授業をつくるだけでもの難しいのに教科への発展が難しいと感じる方もいる。
- 教科横断的に扱うことで道徳教育が軽視されてしまうのではないかと懸念。

実践発表「総合単元的な道徳学習の発展としての総合単元的課題探究型道徳学習の実践」

齋藤道子 先生（目白大学）

総合単元的な道徳学習の主な3類型・各実践の成果と課題

【A】 特定の内容項目を複数時間で扱う方法

- 〈成果〉 特定の内容項目について、考える際の視点を多様に持つことで子どもたち自身の道徳的価値の深化を促した。
- 〈課題〉 個々の授業の相互的な関連、子どもたちの変容や効果のより質的な見取りが必要である。

【B】 複数の内容項目を関連付けて取り組む方法

- 〈成果〉 丁寧な内容理解が、自己の生き方や社会の在り方についての深い思考を促した。
- 〈課題〉 ここでの学びを日常の実践などにつなぐ工夫が必要である。

【C】 各教科や領域等と道徳科授業との効果的連携を図った方法

- 〈成果〉 題材の具体性が子どもたちの主体性を上手く引き出した。
- 〈課題〉 学びの内容を生かす場やパフォーマンス評価の視点が必要である。



単元構成や質的検証の改善

勤務校にて人権教育の充実を図る中で、人権感覚や人権意識の涵養を目指し、知的理解や体験活動と併せて道徳科による内面的な理解を深めていく必要性があった。そこで、「人権について考えよう」を大きなテーマとし、総合単元的道徳学習を計画した。時間の確保、主体的な探究学習、内面的な理解を図るため、低学年は生活科、中・高学年は総合的な学習の時間を活用した。

また、単元の構成をより良いものにすべく、ドイツ NRW 州の実践哲学科のカリキュラム設計やウィギンズとマクタイの逆向き設計論などを取り入れた。さらに、有効性についての質的検証の改善を図り、テキストマイニングやルーブリックの作成など、分析手法をより精緻なものにし、新たな「総合単元的課題探究型道徳学習」を構想した。

- 〈成果〉 一連の総合単元的課題探究型道徳学習を通して、道徳科を核として深めた内面的理解と種々の教育活動が統合され、子どもたちの内面に価値付けが行われていく様子を確認することができた。

- 〈課題〉 子どもたちが自己の生き方や社会の在り方について生涯に亘って考えを深め、日常に生かせるよう、テーマ設定や単元構成、評価、教材の吟味をより良いものにしていく必要がある。

理論提唱者と実践研究者のシンポジウム「複数時間を関連付けた道徳科授業の有効性と可能性」

シンポジスト：押谷由夫 先生、齋藤道子 先生、田沼茂紀 支部長、及川仁美 会員

それぞれの発表について

司会：お互いの発表を聴いて感じたことをお願いします。

齋藤：及川先生のご実践を聴き、中学生は発想も豊かで、思考の変容も柔軟性があるという印象を受けた。また、感じたことをすぐに行動に移す力もある。教師が自分で教材をつくっていることにも感銘を受けた。

押谷：教師と子供の心の通い合いを感じた。まず教師自身が教材に興味を持ち、それを示すことが大切である。また、「当事者意識」「共通解」「納得解」という言葉を皆さんが使うのかを知りたい。

及川：齋藤先生のご発表を聴き、①道徳で「人権」を学ぶことで「心を学ぶこと」の大切さに気付き、それは原点に気づけるよさでもあるということ、②種々の検証方法の知見、③他教科ではなく道徳科を道徳教育の要とすることの重要性などを改めて感じた。



道徳科授業における解について

司会：当事者意識、解について質問もありましたがどうでしょうか。

田沼：45分間の中での解は明確でなくてもよいと感じている。一つの考えのまとまり、道徳的諸価値の理解という捉え方で授業をすると時間内に収まらない。また、価値理解はどのように育成していくべきか。コンテンツ対コンピテンシーの対立構造に陥りかねない。これを解決するヒントとして、SDGsの考え方が参考になる。SDGsの17のゴールのように、「22の道徳的価値マップ」を思い浮かべ、どこに結びつか考え紐づけをする作業が大切ではないか。

複数時間にまたがる道徳科の教科書の扱いについて

司会：複数時間にまたがる道徳科の教科書の扱いについて、どのようにお考えですか。

斎藤：まずは教科書教材で「概念」などを教えていくと思うが、そのうち自分で教材づくりをしていくようになる。教師が教科書を用いる際、教材の登場人物ばかりでなく、自分たちの生活などにも目を向けていくとよい。

押谷：教科書の活用はまだこれからも可能性がある。与えられた教材をどのように活用していくか。連続して投げかけることが必要だと感じる。基本的には22時間で1項目ずつ、残りの時間で可能性を広げるという考え方。

及川：学校や地域によって扱い方が変わるのではないかと。採択された教科書の内容をそのまま実践するよう指示する学校や、勝手に教科書の内容を変えてはいけないと思っている教師も一定数いる。道徳科授業を積極的に推進する教師がいないと、なかなか大胆な授業を提案することはできない。また、教科書会社によってもユニットの捉え方が少しずつ異なる。

田沼：道徳の教材は、食事(=学習)の彩りを添えるためのものであると捉えている。教科書に書かれたメニュー(=教材)全てを食べるのではなく、教師の使い方次第で食事(=学習)も変わってくるのではないかと。教科書を最後までやらないといけないという意識が強いが、それをどのように学びとるか、教師や子どもたちにもっと任せてもよいのではないかと。

「主体的に教科書教材を扱う教師」について

司会：主体的に教科書教材を扱う教師ということが話題に上がりました。道徳科授業において「様々な教材や複数時間を関連付けることが大切である」ということは皆さんで共有できましたが、現場ではなかなか普及しているとはいえない現状があります。これを浸透させるにはどうすればよいでしょうか。

斎藤：現場では「複数時間を関連させた授業」は負担になるため、なかなか盛んにならないのでは。教師の指導力に差があるという側面もある。解決策として、カリキュラムを変えていく必要がある。

及川：「道徳はこう教えるべき」と真面目に実践している教師は多い。地域の学習会などで若手教師に、「こんなに自由でもいいのですか？」と質問されることがある。真面目に取り組んでいるがゆえに、縛りを強くしてしまっているのかもしれない。少しずつ授業の在り方を変えていくことがよいのではないかと。

押谷：これからのことを考えると、教科書編集がポイントになるのではないかと。教科書に複数時間の扱いについての記述がなければ、なかなか流れはできない。道徳科教科書の他教科での活用、電子教科書や動画など様々な工夫が生まれてはいる。

田沼：教科書はナショナルスタンダードでもあり、はみ出しすぎる例をつくっていくことの困難さは理解できる。一方現場では、子どもたちに教材を選ばせたり、教材を組み合わせている教師もいる。現場の意見もお聞かせいただきたい。

参会者：道徳の研究に熱心な方が、特色ある実践を進めるほど、現場との乖離が生まれてくるような「授業のガラパゴス化」もあるように思える。例として、新採用の教師は既に道徳が教科化された環境で仕事が始まったこともあり、教科化当時の思いなどを知る機会があまりない。今回のような道徳科授業の複数時間展開を現場で伝えていくために、内容項目がバラバラになっているときには、学級の中でテーマをつくり、それを教材と組み合わせることが大切なのではないかと感じている。シンプルにまず担任の思いを一本持って、それと道徳を関連付けることを意識したい。

参会者：クラスの子どもたちに、道徳科教科書を「課題解決のツール」として活用できる探究集団になってほしいと考えている。

参会者：学年の担任団で、毎月共通のゆるやかなテーマを設定している。各自が教科書から教材を選んだり、他の教材を持ってきて生徒に伝えたいことに沿って相談した上で決めたり、クラスによって様々な授業の作り方を試している。また、各生徒が独自の道徳ノートを作成し、自分で選んだテーマと共に考えたことをまとめるようにしている。

司会：学習会のまとめとして、シンポジストの先生方から一言ずついただけますでしょうか。

斎藤：道徳科は発展途上である。社会の変化に合わせて子どもたちの学びも変わる。新たな視点の必要性を感じた一日だった。

押谷：教科書の教材が心の支えになる子もいるし、当事者意識が自分事感覚を生み出す。良い授業とは、子どもたちが教材を媒体として自分について語ってくれること。お互いに納得できないことも含めて、皆が認め合うことが大切だと感じる。今の学びに疑問を持つことがより良い方法を模索することに繋がる。

及川：熱量のある先生方と一緒に語り合えてよかった。やはり対面で色々な人と熱く交流することの喜びを感じる。

田沼：「当事者性」など、一つ一つ話題になった言葉に対して、ロジックを組み立ててきたプロセスがそれぞれ少しずつ違う。一人一人が大切にしているものを語り合いながら、すり合わせていきたい。

対面での活動がおこなわれ、直接顔を合わせての実りある会となりました。また、今回はハイブリッド開催であり、遠方にお住まいの方々にもご参加いただいたこと、大変嬉しく思います。次回も先生方と一緒に勉強できることを心待ちにしています。

(詳しい内容につきましては神奈川支部ホームページをご覧ください。) <http://www.doutokukanagawa.com/>